

ブラフマーストラのプラーナ説 — 俱舎論の風説との比較研究 —

長友泰潤

南九州大学 教養・教職センター 哲学研究室

2016年10月1日受付; 2017年2月1日受理

On the theory of Prāṇa in Brahmasūtrabhāṣya

Taijun Nagatomo

Laboratory of philosophy, Minamikyusyu University,
Miyakonojo, Miyazaki 885-0035, Japann

Received October 1, 2016; Accepted February 1, 2017

In the theory of the Brahmasūtrabhāṣya (Bbh), Śāṅkara's commentary on Brahmasūtra, vāyu (or prāṇa) has two meanings, namely, the internal five winds and the god of wind. Vāyu the internal five winds come into the Self and divide into five parts. Each of which has a special quality. These parts are sometimes individually called prāṇa, udāna, samāna, apāṇa and vyāna depending on their organic function but sometimes 'prāṇa' is used as a general term for all five parts. And these five prāṇa aren't the function of the internal organs like manas and buddhi. When prāṇa goes out of the Self, the body and all the sense organs become weak. prāṇa plays an important role in the maintenance of the Self.

In the view of Abhidharmakośabhāṣya (AK), vāyu is a primary element like pṛthivī, ap, and tejas, and it's natural constitution is driving or moving. Vāyu doesn't mean the Brahman itself, and it doesn't consist of prāṇa, udāna, samāna, apāṇa and vyāna.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference between the view of vāyu (or prāṇa) in the Bbh and the view presented in the AK. In the AK, vāyu doesn't mean the Brahman itself, and it doesn't consist of the five winds like prāṇa. In the Bbh, vāyu means the Brahman itself, and it consists of the five winds.

In these two schools, there is one similarity which the natural constitution of vāyu (or prāṇa) is driving or moving.

Key words: prāṇa, vāyu, five winds.

序 論

ここでは、仏教思想に見られる四大種の一つである風とシャンカラの思想に見られる風或いは生氣とを比較検討する。仏教思想については、四大種である風について説明のある俱舎論・Abhidharmakośahāṣya (以下AK)¹⁾を取り上げ、シャンカラについては、既に検討したことのあるブラフマーストラ (以下BS) に対する注釈書ブラフマーストラパーシュヤ (以下Bbh) の見解を見ていくこととする²⁾。シャンカラの見解では、

風 (vāyu) 或いは生氣 (prāṇa) は宇宙的風、そして個人の氣息として説明されている。ここでは、風或いは生氣がブラフマンから生じ、身体の中で、五種に働くというヴェーダーンタ派の見解と、俱舎論の風についての説を比較検討し、その違いを明らかにしていく。

1. AK (俱舎論) の風説

AK の中では、風 (vāyu) は四大種 (粗大元素) の一つとして、説かれている。

すなわち、

「〔四〕大種によって」と説かれたが、大種とは

何か。

大種とは地界・水〔界〕・火〔界〕・風界である、(1・12ab) という。これら四は自相および所造色を保持するから界であり、〔また〕四大種といわれる。」

mahābhūtānyupādāyetyuktvāni katamāni bhūtāni/
bhūtāni pṛthivīdhāturatejovāyudhātavaḥ/
ityete catvāraḥ svalakṣaṇaupādāyarūpadhārnād
dhātavaścātvarī mahābhūtānyucyante/³⁾

また、AK では、風を始めとする四大種はすべての色の拠り所であり、大きな場所を占めるから大であるとされる。

すなわち、

「これらは他のすべての色の拠りどころであることによって、広大であるから、あるいはまた、これらはそれより生じた〔保持などの〕作用のある地・水・火・風の集まりの中において、大きな場所を占めるから、大なのである。」

mahattvameṣāṃ sarvānyarūpāśrayatvenaudārikatvāt/
athavā tadubbhūtavṛttiṣu
pṛthivyaptejovāyuskandheṣveṣāṃ
mahāsaṃniveśatvāt/⁴⁾

さらに、AK では、地界は保持、水界は包摂、火界は熟成、そして風界の勝れた作用は、増長とされる。

すなわち、

「それでは、これら〔四〕界は〔それぞれ〕どんな作用において〔他より〕勝れているか、どんな自性をもっているか〔といえ、〕曰く、保持などの作用において勝れている。(1・12c) これら地・水・火・風界は、それぞれ、保持・包摂・熟成・増長の作用において勝れている。」

te punarete dhātavaḥ kasmin karmaṇi
saṃsiddhā kiṃsvabhāvāścetyāha
dhṛtyādikarmasaṃsiddhā
dhṛtisamgrahapaktivyūhanakarmasvete
yathākramam saṃsiddhāḥ pṛthivy-
aptejovāyudhātavaḥ/⁵⁾

そして、AK では、風界の勝れた作用である増長とは増大、流動の意味を持つとされる。

すなわち、

「そして、増長とは増大〔の意味〕であり流動〔の意味〕である、と知るべきである。これがそれら〔四大種〕の作用である」

vyūhanam punarvṛddhiḥ ca veditavyam/
idameṣāṃ karma/⁶⁾

また、AK では、地界等の四大種の自相を、それぞれ、堅さ、湿りけ、温かさ、動きとし、特に、風界は灯火の動くように、次々と生じる場所を変えて行くから、色は動くこととされる。

「〔それらの〕自性は、それぞれ、堅さ・湿りけ・温かさ・動きである。(1・12d)

地界は堅さであり、水界は湿り気であり、火界は温かさであり、風界は動きである。こ〔の風界〕によって、〔大〕種の流れが、あたかも灯火の動く如くに、次々と生起する場所を変えて行くから、〔色は〕動くのであって、それゆえに〔風界は〕

動きである。」

svabhāvastu yathākramam
kharasnehoṣṇaterañāḥ//12//
kharāḥ vāyudhātuḥ/ sneho abdhātuḥ/
uṣṇatā tejodhātuḥ/ īraṇā vāyudhātuḥ/
īryate anyā bhūtasroto deśāntarautpādanāt
pradīperañavaditīraṇā/⁷⁾

また、AK では、『品類論』と『経』の中には、風界は軽さと動きであるとしている。

「『品類〔論〕』及び『経』の中には、「風界とは何か。軽さと動きである、」と示されている。しかし、『品類〔論〕』の中にはまた「この軽さは所造色である、」とも説かれているから、それゆえに、動きを自性とする法がすなわち風であると、〔動きという〕作用によってそれ（風界）の自性は明らかにされる。」

“vāyudhātuḥ katamo laghusamudīraṇatva”

miti prakaraṇeṣu nirddiṣṭam sūtre ca/
tattu laghutvam upādāya rūpamapyuktaṃ prakaraṇeṣu/
ato ya īraṇāsvabhāvo dharmāḥ sa vāyuriti karmanā
asya svabhāvo abhivvyaktaḥ/⁸⁾

小 結

以上の検討から、AK では、風 (vāyu) は四大種の一つであり、これら風を始めとする四大種はすべての色の拠り所であり、大きな場所を占めるから大であるとされる。それぞれの四大種の勝れた作用は、地界は保持、水界は包摂、火界は熟成、そして風界は増長とされる。さらに、この風界の勝れた作用である増長とは増大、流動の意味を持つとされる。

また、AK では、地界等の四大種の自相を、それぞれ、堅さ、湿りけ、温かさ、動きとし、特に、風界は灯火の動くように、次々と生じる場所を変えて行くから、色は動くこととされる。色の動く原因は風にある。そして、AK は『品類論』と『経』の中には、風界は軽さと動きであるとしているとする。

2. Bbh の見解と AK の見解との比較

a.) 宇宙的風

Bbh ではムンダカ・ウパニシャッドを引用し、風がプルシャのために、車輪の穴の如き穴をあけ、プルシャはそこを通り、太陽に到達する。このような壮大な、神話的な風は AK の言説には見られない。

すなわち、

「『プルシャ (puruṣa) がこの世界を出ていくとき、彼はヴァーユ (vāyu) に到着する。その〔ヴァーユ〕は、彼のために、あたかも車輪の穴 (rathacakra) の如き〔穴〕をそこにあける。それによって彼は上昇す。彼は太陽に到着す』(ブリハト 5.10.1) というのがそれである。」⁹⁾

また、Bbh ではプルシャは神の世界からヴァーユに入り、さらに太陽に達するとされる。

「『月 (六か月・半年) より〔プルシャは〕神の世界 (devaloka) に〔達す〕、神の世界より太陽〔の

世界]に》(ブリハド6.2.15)と朗誦する。この場合に、太陽が[ヴァーユに]続いて到達される[ことを確実にする]ために神の世界から[プルシャが]ヴァーユに入ると[理解]すべきであろう」¹⁰⁾

また、Bbhでは、対論者の説として、生気が五種にはたらく風であるとしている。さらに、この一切の世界は生氣と名付けられ、金剛杵が振りかざされるように、風が雨雲の状態で回転するとき、電光、雷鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るとする。また、聖典が引用され、「ヴァーユにはまさに個物なり、ヴァーユは全体なり、かく知る者は再死に打ち勝つ」という言及が示されている。これに対するヴェーダーンタ派の答えとして、敵論者の説を否定するのではなく、これはまさにブラフマンであると承認されねばならないとする。AKでも風の勝れた作用は増大と流動であり、その自相は動きとされているので、全体の印象は一致している。

すなわち、

「[論者の主張] 広く知られているように、生氣(prāṇa)とは五種にはたらく風(pañcavṛttivāyu)である。また、まさに広く知られていることから、金剛杵(vajra)は稲妻であろう。そしてこれは風の偉大がのべられているのである。どうしてか。この一切の世界は、生氣と名付けられ、五種にはたらく風に安住して、動揺する。またまさに風にもとづいて、大いに恐るべき金剛杵が、振りかざされる。何となれば、風が雨雲の状態で回転する時、電光、雷鳴、雨、稲妻が回転すると人々は語るからである。また、風の認識から、まさしくここに不死たること(amṛtatva)がある。即ち、《ヴァーユ(風神)はまさに個物なり。ヴァーユは全体なり。かく知る者は再死に打ち勝つ》(ブリハド3.3.2)と他の聖典に説かれているからである。このようなわけで、ここで、[すなわち、生氣]は風であると承認されねばならない。[ヴェーダーンタ学派の答破] 以上のように提言されたので、我々は[次のように] 答える。-ここでは、これはまさにブラフマンと承認されねばならない。」¹¹⁾

b.) 個人の生氣

Bbhではムンダカ・ウパニシャッドを引用し、一切の生氣はブラフマンから生じ、空、風、火、水、地がブラフマンから生じるように、生氣、意、及び一切の器官がブラフマンから生じるとする。仏教思想では、ブラフマンを認めないので、当然、AKでは風も生氣もブラフマンから生じたとは解釈しない。

すなわち、

「[同様に一切の生氣(prāṇa)も[最高我より生ず、]一切の世界、一切の神々、一切の存在(bhūta)飛散す。】(ブリハド2.1.20)というこのような類の生氣の発生を説く。ここでは、[即ちこの引用文では]世界等が最高のブラフマン(brahmaṇa)から発生するように、それと同様に生氣もまたその通りであるとの意味が述べられている。

同様に、《これより、生氣(prāṇa)、意(manasa)、

及び一切の器官(indriya)生ず。空、風、火、水、すべての支持者である地が[生ず]》(ムンダカ2.1.3)と、かような箇所などによっても、空等のように、生氣にも発生があると認めねばならない。」¹²⁾

また、Bbhでは、生氣に差別はなく、ブラフマンの変異であり、器官を伴う意とは別に生氣が説かれていることから、生氣が意とは別の存在であるとされる。AKでも意は十八界の中の六識の一つとして、別に説かれている。¹³⁾

すなわち、

「また、主要の生氣も別の生氣と同様にブラフマンの変異(vikāra)であると[前経の説明を]拡大して示す。またそれについて[次のように]一切の生氣は全く差別なく、ブラフマンの変異であると既に説明された。すなわち、《この[ブラフマン]より、生氣、意、及び一切の器官(indriya)は生ず》(ムンダカ2.1.3)と器官を伴う意とは別に、生氣の発生が聖典に[説かれているか]らである。」¹⁴⁾

Bbhでは個人の生氣についても言及しており、風が身体に入って、五つの局面に別れ、生氣(プラーナ)と呼ばれるとする。AKでは風(vāyu)が五つの生氣に別れるという言説はない。

すなわち、

「まさしく、風がこの自己の中に入って五つの局面(pañca-vyūha)に別れ、特殊の性質で安住しているときに、生氣(prāṇa)という名で呼ばれる。[風とは]別の実在でもなく、ただ風だけ(vāyumātra)でもない。」¹⁵⁾

さらに、Bbhでは、個人の生氣について、それが出ていこうとした時には、器官は衰弱し、身体が崩壊するので、身体と器官の存立には欠かせない存在とする。

すなわち、

「また、《汝らのうち、或ものが出て行く時、身体(śarīra)が最も悪しき状態にあるが如く見えるもの、其のものが汝らのうち最勝なり》(チャンドグヤ5.1.7)と論じて、一つ一つ言語器官等が出て行っても、ただその機能が欠けるだけで、前と同じように生命が持続されることを明示したあと、生氣が出ていこうとした時に、言語器官等が衰弱に陥り、且つ身体の崩壊(śarīra-pāta)が付随することを聖典は明示して、身体と器官の存立が生氣に基づくことを明示している。」¹⁶⁾

また、Bbhでは、個人の生氣の五つの機能について説明があり、前方への機能で、出る息等の作業をする呼気(プラーナ)と後方への機能で、入る息等の作業をする吸気(アパーナ)、両者の接合において、力を要する作業の原因となる媒気(ヴヤーナ)、上方への機能であり、[死亡時の靈魂の]出発等の原因である上気(ウダーナ)、身体は一切の支分に等しく食の精髓を運ぶ等気(サマーナ)の五つの機能があるとする。

すなわち、

「聖典に《呼気・吸気・媒気・上気・等気》(ブリハド1.5.3)とこのように指名されているから、また主要の生氣に、独特の所作がある。そして、

この機能の区別は所作の区別に依存している。呼気 (prāṇa) は前方への機能で、出る息等の作業をする。呼気 (apāṇa) は後方への機能で、入る息等の作業をする。媒気 (vyāna) はこの両者の接合において存在し、力を要する作業の原因となる。上気 (udāna) は上方への機能であり、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である。等気 (samāna) は身体は一切の支分に、等しく食の精髓を運ぶ。』¹⁷⁾

さらに、Bbh では、生気が呼気等の5つの機能によって、全身に遍満しているのので、微塵であるとされる。すなわち、

「また、この主要な生気は、残りの生気と同様に、微塵と理解されるべきであるそしてこの場合にもまた、微塵とは、微細と限定とである。それは極微 (paramāṇu) とは等しくない。〔呼気吸気等の〕五つの機能によって、全身に遍満しているからである。〔主要の〕生気は微細である。〔死に際して身体から〕出発する時に、傍らにいる人に認識されないからである。また、〔生気は〕限定されている。出発、進行、帰来が聖典に説かれているからである。』¹⁸⁾

また、Bbh では、聖典において、生気と器官が別々に表示されているから、器官と主要の生気が別ものであるとされている。

すなわち、

「発声器官等は〔主要の〕生気とは全く別ものである。何故か。表示に区別があるからである。表示に区別があるとは何か。話題になっている諸生気は、最勝〔の生気〕を除外して残った十一の器官であると言われる。聖典において、次のように表示が認められるからである。すなわち、《これより、生気、意、並びに一切の器官生ず》(ムンダカ2.1.3) というこのような類の場所において、生気と器官とが別々に表示されているからである。』¹⁹⁾

さらに、Bbh では、主要の生気と残りの器官との違いについても言及している。器官が熟睡している時、主要な生気は一人目覚めている。また、主要な生気は死に襲われない。そして、主要な生気のみが身体の維持と滅亡の理由となる。さらに、器官は対象を認識するが、主要な生気はそうではないとする。AK では、生気についての記述もなく、その元となる風 (vāyu) が対象を認識するというものもない。

すなわち、

「また、主要〔の生気〕と残りには、特徴の違いがある。発声器官等が熟睡している時、ただ主要〔の生気〕独りが目覚めている。また、そのみが死に襲われない。しかし、残りは襲われる。またそれ(主要の生気)だけが、そこ(身体)に安住することと、そこから出発することによって、身体の維持と滅亡の理由となる。また、器官は対象を知覚することの原因であるが、〔主要の〕生気はそうではない。このような類の多くの特徴の区別が、生気と器官の間にある。このような理由からしても、これらに別の実在たる関係が成立する。』²⁰⁾

結 論

Bbh の風・生気はブラフマンの変異であるとされる。ブラフマンを認めない AK では、当然、風はその変異ではない。Bbh では、生気は意とは別の概念を持つ存在であり、別個に教示される。AK でも、意は六識の一つであり、風とは別に説かれており、これは Bbh と同じである。

さらに、Bbh では、風が身体に入ると、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住している時に、生気と呼ばれる。これが、個人の生気である。この生気が身体から出ていこうとする時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体にとって、生気は欠かせない存在であるとする。この生気には、五つの機能があり、それぞれ名称が付けられている。前方への機能が、出る息等の作業をする呼気(プラナーナ)であり、後方への機能は、入る息等の作業をする吸気(アパーナ)、両者の接合において、力を要する作業の原因となるのが媒気(ヴァーナ)、上方への機能は、〔死亡時の靈魂の〕出発等の原因である上気(ウダーナ)、さらに、身体は一切の支分に等しく食の精髓を運ぶものが、等気(サマーナ)である。そして、この呼気等の5つの機能によって、生気は全身に遍満しているのので、微塵である。また、器官が熟睡している時、主要な生気は一人目覚めており、しかも、死に襲われない。この主要な生気のみが身体の維持と滅亡の理由となる。また、器官は対象を認識するが、主要な生気は認識しない。

AK には生気について、それが五風となることや身体の維持と滅亡に関わるものであるという言説はない。そして生気元となる風が対象を認識するという言説もない。しかし、AK では、風の勝れた作用である増長とは増大、流動の意味を持つとされ、地界等の四大種の自相の中で、特に、風は灯火の動くように、次々と生じる場所を変えて行くから、色は動くと言う。また、『品類論』と『経』の中では、風界は軽さと動きであると言う。AK には、Bbh ほど風についての詳細な説明はないが、このような流動性や軽さ、動きを風の特徴とすることは、Bbh の風や生気を持つ五つの機能が示すような流動性と動きという特徴と同じである。

摘 要

Bbh では風はブラフマンの変異であるが、ブラフマンを認めない AK では、当然、風はその変異ではない。また、Bbh では、生気は意とは別の概念を持つ存在であり、別個に教示される。AK でも、意は六識の一つであり、風とは別に説かれている。

さらに、Bbh では、風が身体に入ると、五つの局面に別れ、特殊の性質で安住している時に、生気と呼ばれる。これが、個人の生気である。この生気が身体から出ていこうとする時には、器官が衰弱し、身体が崩壊するので、身体にとって、生気は欠かせない存在であるとする。この生気には、呼気(プラナーナ)や吸気(アパーナ)等の五つの機能がある。AK にはこのような

生氣について言説はなく、生氣の元となる風が対象を認識するという言説もない。また AK では、風の勝れた作用である増長とは増大、流動の意味を持つとされ、地界等の四大種の自相の中で、特に、風は灯火の動くように、次々と生じる場所を変えて行くから、色は動くとされる。さらに、『品類論』と『経』では、風界は軽さと動きであるとする。風が流動性や軽さと動きを特徴とすることは、Bbh の生氣の持つ五つの機能が示すような流動性と動きを伴うという特徴と類似している。

注 記

- 1) AK Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu edited by Prof.P.PRADHAN K.P.Jayaswell Research Institute Patna 1975
- 2) Bbh Brahmāsūtraśāṅkarabhāṣya edited with special references from Ratnaprabhā Nyāyanirṇya etc. by K.L.Joshi Parimal Publications Vol.1. 2 Parimal Sanskrit Series No.1. 1996,長友泰潤「ブラフマースートラパーシュヤのプラーナ説」南九州大学研究年報第42B号 pp.31-37
- 3) AK 1.12 AK p.8 II. 11-13. 桜部建『俱舍論の研究』法蔵館 1975 p.159参照
- 4) AK 1.12 AK p.8 II. 14-15. 桜部上掲書 p.159参照
- 5) AK 1.12 AK p.8 II. 5-18. 桜部上掲書 p.159参照
- 6) AK 1.12 AK p.8 II. 18-19. 桜部上掲書 pp.159-160参照
- 7) AK 1.12 AK p.8 II. 19-22. 桜部上掲書 p.160参照
- 8) AK 1.12 AK p.8 II. 22-25. 桜部上掲書 p.160参照
- 9) Bbh ad BS 4.3.2 Bbh Vol.2. p.988, II. 10-11. 金倉円照『シャンカラの哲学』下 p.553 II. 14-16参照
- 10) Bbh ad BS 4.3.2 Bbh Vol.2. p.989, II. 4-5. 金倉上掲書下 p.554 II. 12-15参照
- 11) Bbh ad BS 1.3.39 Bbh Vol.1. p.359, I.7~p.360, I.3. 金倉上掲書上 p.281 II. 5-14参照
- 12) Bbh ad BS 2.4.1 Bbh Vol.2. p.630, II. 12-16. 金倉上掲書下 p.102 II. 4-7参照
- 13) Bbh ad BS 2.4.8 Bbh Vol.2. p.638, II. 1-3. 金倉上掲書下 p.118 II. 5-8参照
- 14) AK 1.12 AK p.11 II. 11-14. 桜部上掲書 p.168参照
「界として立てる場合、同じそれは また七界と考えられる。(1・16c)
七とは何か。六識と、そして意である。(1・16d)」
dhātuvyavasthāyām sa eva
dhātavaḥ sapta ca matāḥ
katame sapta/ ṣaḍ vijñānānyatho
manaḥ//16//
- 15) Bbh ad BS 2.4.9 Bbh Vol.2. p.640, II. 12-13. 金倉上掲書下 p.122 II. 5-8参照
- 16) Bbh ad BS 2.4.11 Bbh Vol.2. p.641, II. 15-18. 金倉上掲書下 p.125 II. 1-5参照
- 17) Bbh ad BS 2.4.12 Bbh Vol.2. p.641, I. 26~p.642, I. 4. 金倉上掲書下 p.126 II. 3-9参照
- 18) Bbh ad BS 2.4.13 Bbh Vol.2. p.642, II. 12-14. 金倉上掲書下 p.127 II. 10-14参照
- 19) Bbh ad BS 2.4.17 Bbh Vol.2. p.647, II. 4-7. 金倉上掲書下 p.133 II. 13-17参照
- 20) Bbh ad BS 2.4.19 Bbh Vol.2. p.648, II. 8-11. 金倉上掲書下 p.135 II. 3-8参照

